

蒲船津西ノ内遺跡

5. 蒲船津西ノ内遺跡

本遺跡は柳川市の東部、福岡県柳川市三橋町大字蒲船津314-1~4・5A番地に所在する。調査面積は約900㎡である。発掘調査は、平成18(2006)年12月4日より重機による掘削から開始した。12月6日より作業員による掘削を開始した。平成19(2007)年1月15日、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。1月31日に埋め戻しを終了し、調査を完了した。

1) 遺構 (図版25)

遺跡は西鉄天神大牟田線の西側に展開する現在の集落の西端に位置する。遺跡の現況は水田であった。周辺には、低湿地の水はけの悪さを解消するため、この地域特有の掘割(クリーク)が縦横に掘られている。

遺構面は標高約2.0mである。工事用の客土および約30cmの耕土の下に淡茶褐色土の遺構面が存在していた。遺構の埋土は暗茶灰色を中心とした土で、検出は比較的容易であった。しかし、低湿な遺構面であり、粘質な埋土の掘削には大きな労力を要した。

検出した遺構は、土坑2基、灰だまり1基、溝状遺構2条である。時期的には中世後期にほぼ限定される。

a) 土坑

1号土坑 (図版26、第149図)

調査区の北寄りに位置する。ほぼ円形の土坑である。東側半分を試掘トレンチによって削っているが、現存で長軸58cm、短軸57cmのほぼ円形を呈する。深さは約158cmで、壁の立ち上がりは急である。埋土は暗茶灰色であった。形状から素掘りの井戸の可能性が高いと考えている。遺物は、土製鈴1点が出土しているのみである。

出土遺物(図版30、第151図)

1は土製の鈴である。全長4.2cm、最大径3.2cmである。手づくねでつくられており表面には指の圧痕が残る。上部の穿孔は焼成前に両側から行われている。鈴口の部分は鋭利な工具で開口されている。

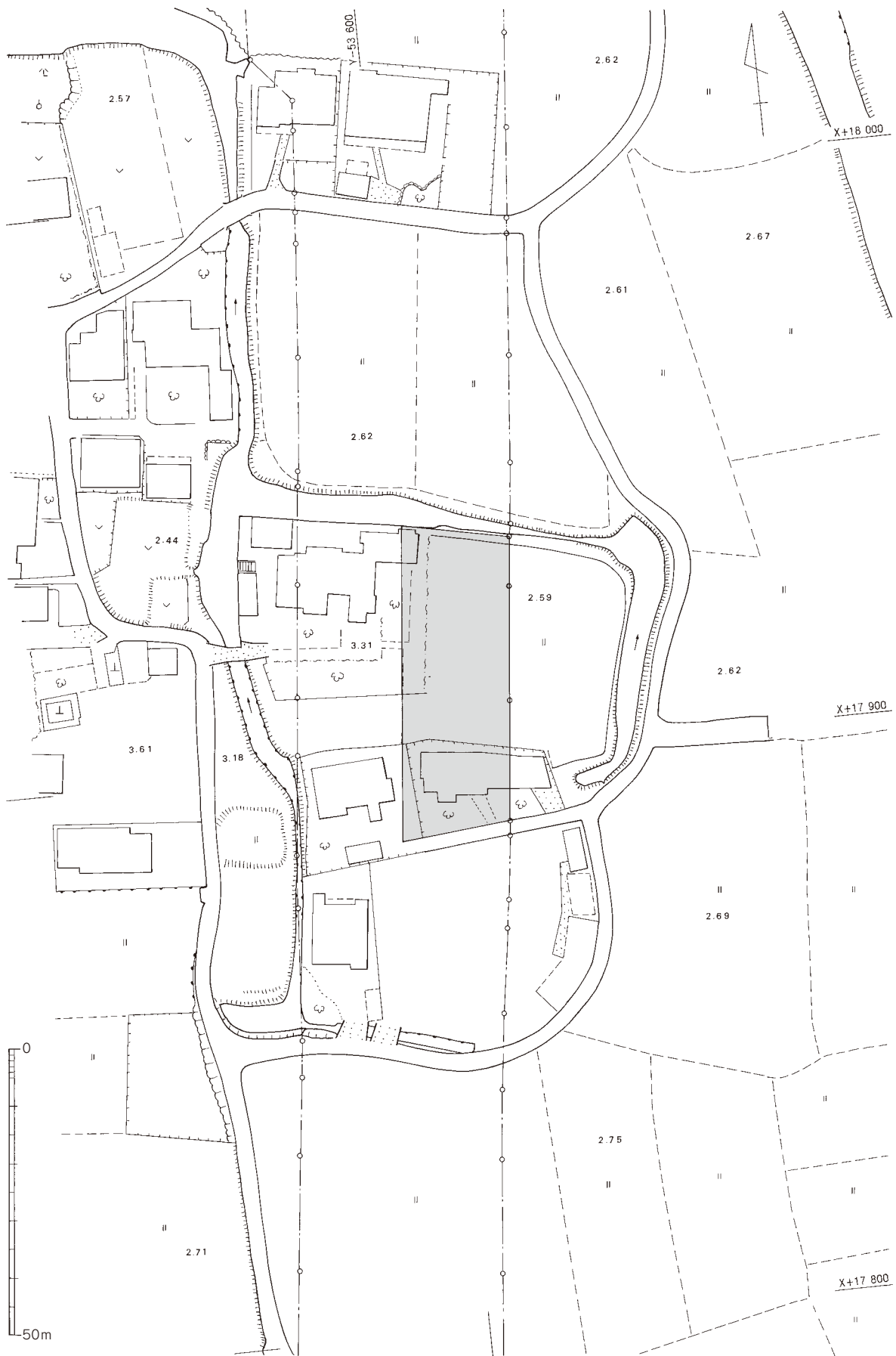
2号土坑 (図版26、第149図)

調査区の中央やや東寄りに位置する。長軸65cm、短軸58cmのやや楕円形を呈する。深さは約26cmで、壁の立ち上がりはやや急である。埋土は暗茶灰色であった。遺物は出土していない。

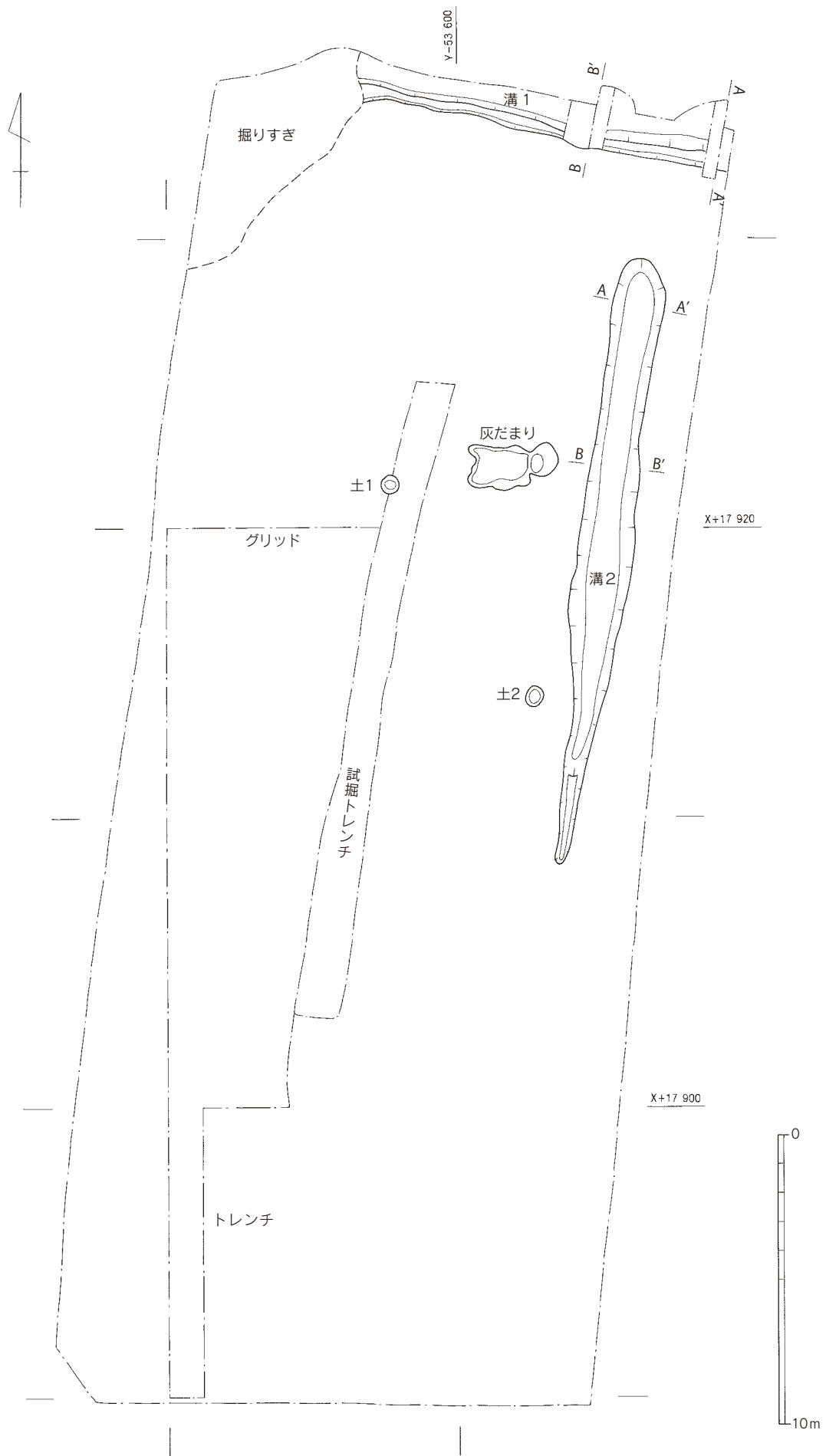
b) 灰だまり

灰だまり (図版26、第149図)

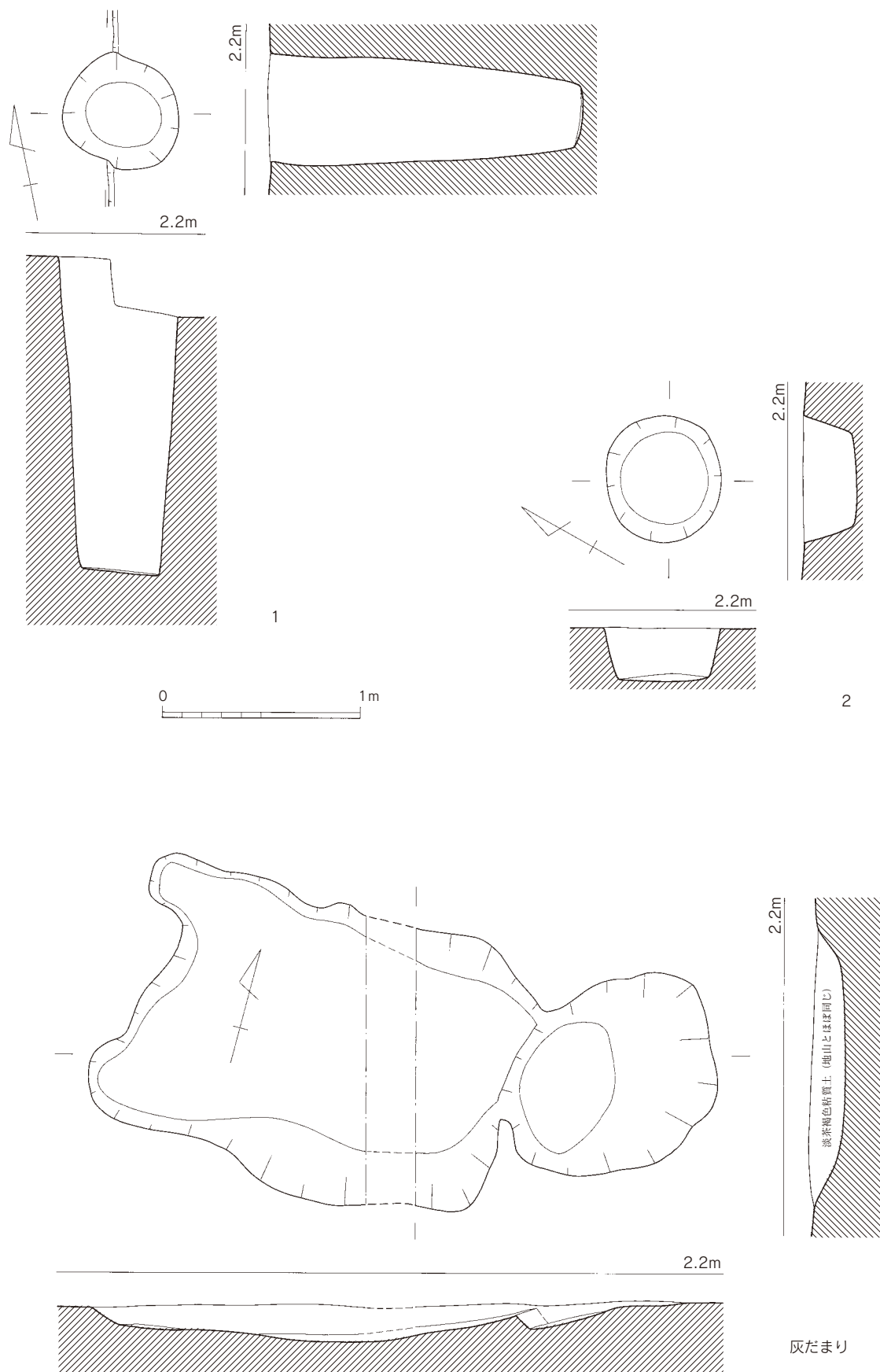
調査区の北寄りに位置する。長軸315cm、短軸152cmの不整形を呈する。深さは約17cmで、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は淡茶褐色であり、地山の色と酷似する。底面および壁面には、暗灰色の灰が薄く堆積しており、灰の上にある埋土を剥ぐような状況で掘削を行った。人為的なものではなく、自然にできた凹凸のある地形に灰が堆積した可能性もある。遺物は出土していない。



第146図 蒲船津西ノ内遺跡調査区位置図(1/1,000)



第147図 蒲船津西ノ内遺跡遺構配置図(1/200)



第148図 1・2号土坑・灰だまり実測図(1/30)

c) 溝状遺構

1号溝 (図版27、第147・149図)

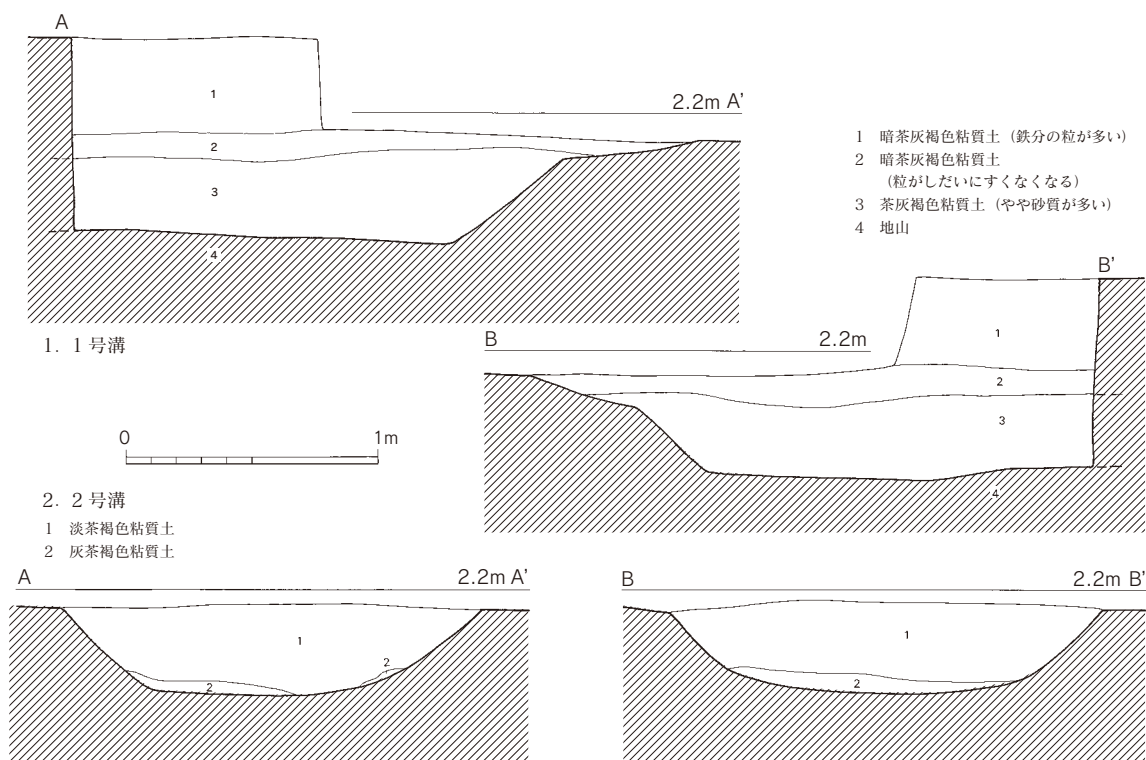
調査区の北端部に位置する。北側の立ち上がりは調査区外へ広がるため、溝の幅は不明である。深さは約40cmである。東西方向に走る溝で、東側は調査区外へ延び、西側は重機による表土掘削時に掘りすぎてしまったため、失われた。埋土は暗茶灰褐色であった。遺物は出土していない。

2号溝状遺構 (図版27・28、第147・149図)

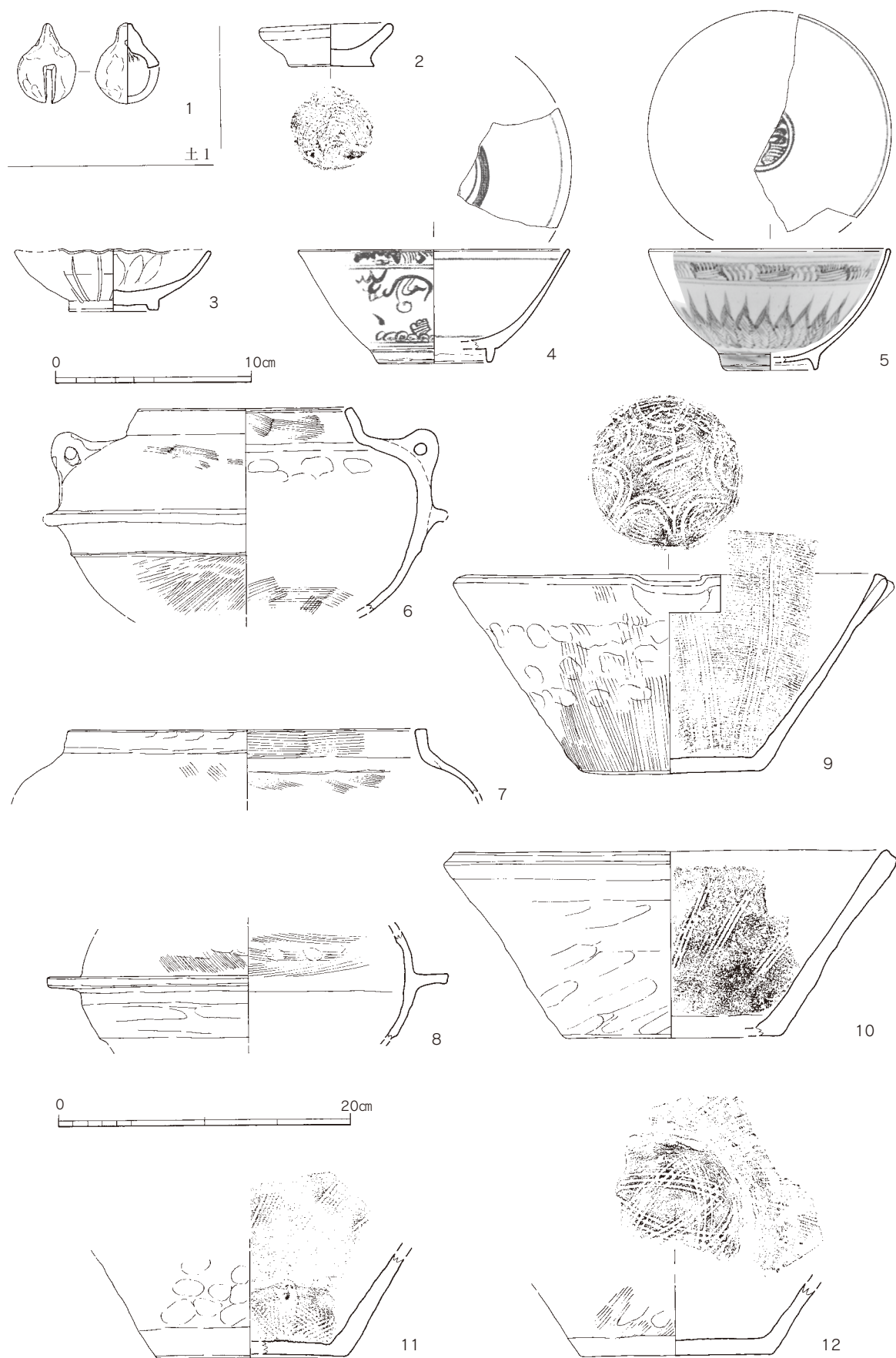
調査区の東寄りに位置する。南北方向に走る溝で、北側は端部が丸く終わる。幅は約160cm、深さは約35cmである。南側は次第に浅く、細くなり消えている。埋土は淡茶灰色であった。遺物は陶磁器、瓦質土器が出土している。

出土遺物(図版30、第150図)

2は土師皿である。器壁が厚く、底部も極めて厚い。内外面ともにナデ調整であり、底部は糸切りである。口径6.9cm、底径4.2cm、器高2.3cmである。3は陶器の皿である。内外面を菊花状に型押ししている。釉色は黄灰色を呈する。口径10.2cm、底径4.6cm、器高3.1cmである。4は青花である。いわゆる蓮子碗と呼ばれるもので、外面には雲状の文様と波状の文様が描かれる。見込みにも文様が描かれるが、図案は不明である。畳付け部分は露胎である。15世紀後半から16世紀前半であろう。口径14.0cm、底径6.0cm、器高5.8cmである。5も青花の蓮子碗である。外面には芭蕉文、内面には巻貝の文様であろうものが描かれている。畳付け部分は露胎である。15世紀後半から16世紀前半であろう。口径12.4cm、底径4.5cmである。6は瓦質の茶釜である。口縁部がやや内傾し、肩の張る器形である。肩部の2箇所環付が付く。胴部にはやや短めの羽が付く。内外面の調整は刷毛目である。肩部内面には圧痕が見られる。底部付近にはススが付着する。口径14.6cm、胴部最大径28.0cmである。7はやや大ぶりの釜の口縁部分である。わずかに



第149図 1・2号溝状遺構土層実測図(1/30)



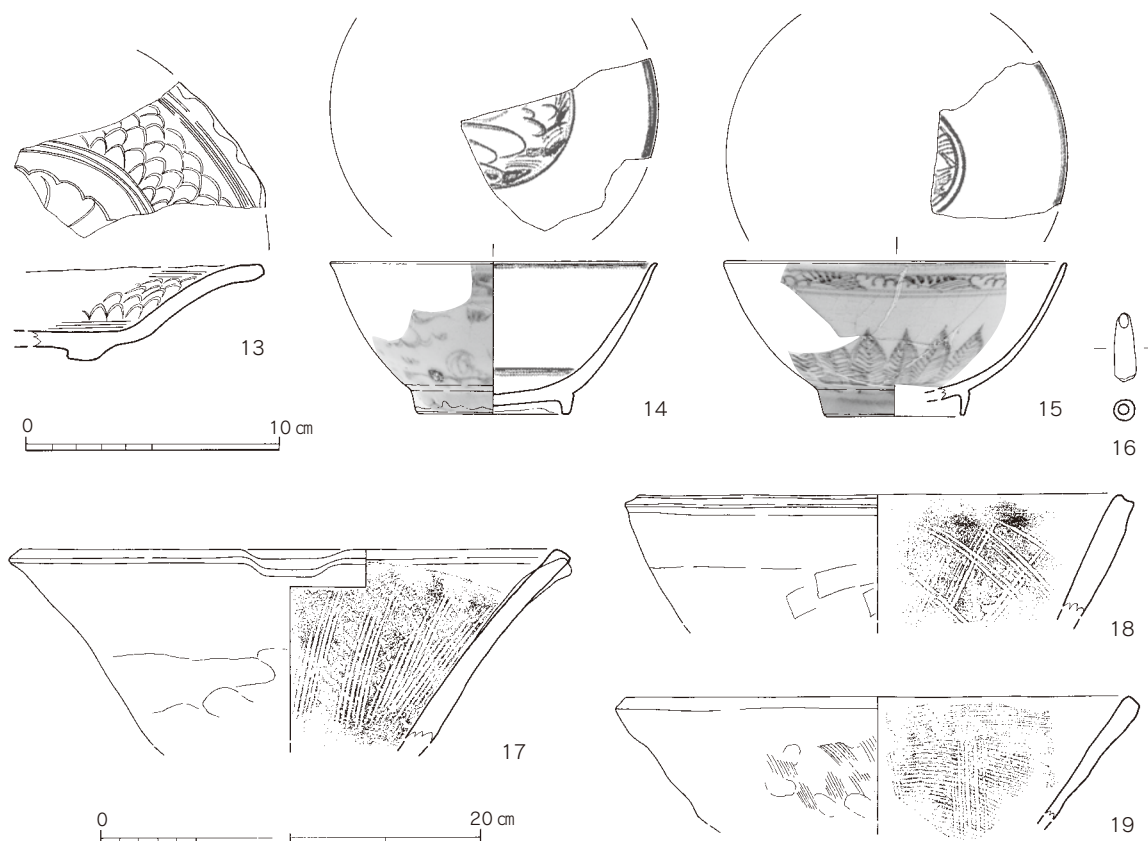
第150図 1号土坑・2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1~5は1/3、他は1/4)

溝2

内傾する口縁である。内外面の調整は刷毛目で、部分的に圧痕が残る。口径24.8cmである。8は釜の胴部である。わずかに上を向いて羽が付けられる。内外面は刷毛目調整で、部分的にナデ調整である。内面には圧痕が残る。胴部最大径27.6cmである。9～12は瓦質の擂鉢である。9はほぼ直線的に広がり、口縁部の一ヶ所に口を付ける。外面の調整は刷毛目で、内面は、刷毛目調整の後、擂目を施す。口径29.0cm、底径12.4cm、器高13.5cmである。10の外面は強いナデ調整である。内面はナデの後、擂目を施す。内外面にススが付着する。口径30.8cm、底径15.0cm、器高12.8cmである。11の外面は強いナデである。内面には擂目を施す。底径12.9cmである。12の外面は刷毛目で、圧痕が残る。内面には擂目を施す。底径は13.1cmである。

d) 遺構面出土遺物 (図版30、第151図)

13は青磁の皿である。腰折れで、口縁が大きく開く。口縁端部は削って輪花状に仕上げている。見込みは花文であろうか、内面には花卉を重ねたような文様が描かれる。釉薬は厚く施される。器高は3.8cmである。畳付けおよび底面は露胎である。14は青花の蓮子碗である。外面には飛馬文と雲状の文様が描かれる。見込みには巻貝が描かれる。畳付け部分は露胎である。15世紀後半から16世紀前半であろう。口径13.0cm、底径6.0cm、器高6.0cmである。15も蓮子碗である。外面には芭蕉文が描かれる。見込みの文様は不明である。畳付け部分は露胎である。口径13.5cm、底径5.4cm、器高6.2cmである。16は素焼きの土錘である。直径0.9cmである。表面の調整は不明である。17から19は瓦質の擂鉢である。17は口縁部に口を設けるものである。外面はナデ調整である。内面はナデ調整の後、擂目を施す。外面にはススが付着する。口径30.0cmである。



第151図 遺構面出土土器・陶磁器実測図(13～16は1/6、他は1/4)

18の外面はナデ調整である。内面は格子状に揃目を施す。口径26.8cmである。19の外面は刷毛目調整である。部分的に圧痕が残る。内面は刷毛目調整で揃目を施している。口径は27.5cmである。

2) 小結

本調査区では、土坑2基、灰だまり1基、溝状遺構2条を検出した。遺構の希薄さから今回の調査区は遺跡の縁辺部と考えられる。現在の集落は調査区の西側に展開しており、遺跡の本体も、現集落の下に広がるものと考えられる。今後の調査に期待したい。



1. 蒲船津西ノ内遺跡全景
(西から)



2. 同上全景 (北から)



1. 1号土坑（東から）



2. 2号土坑（南から）



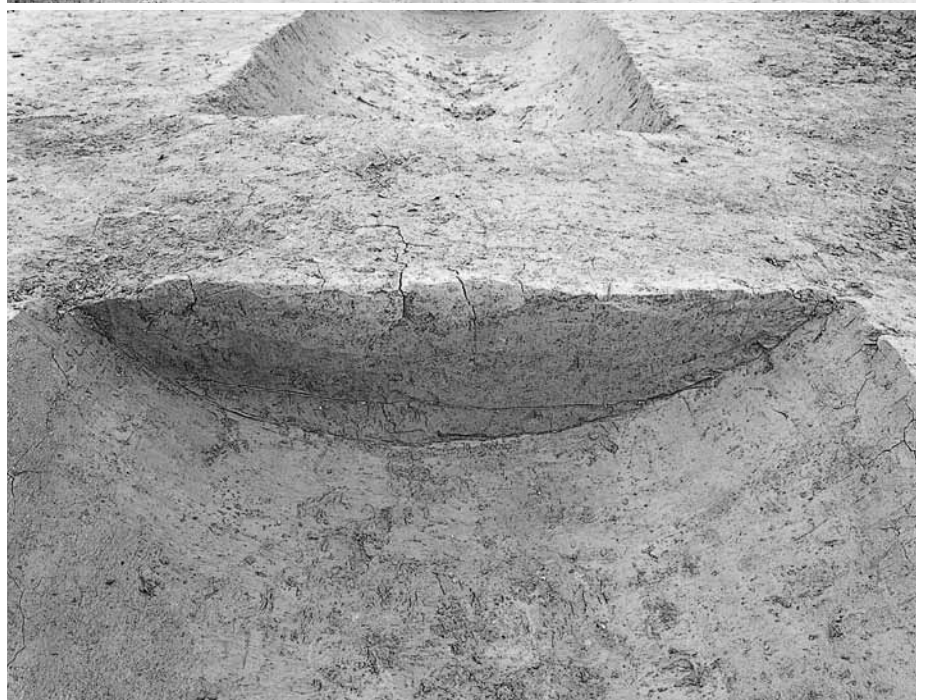
3. 灰だまり（南から）



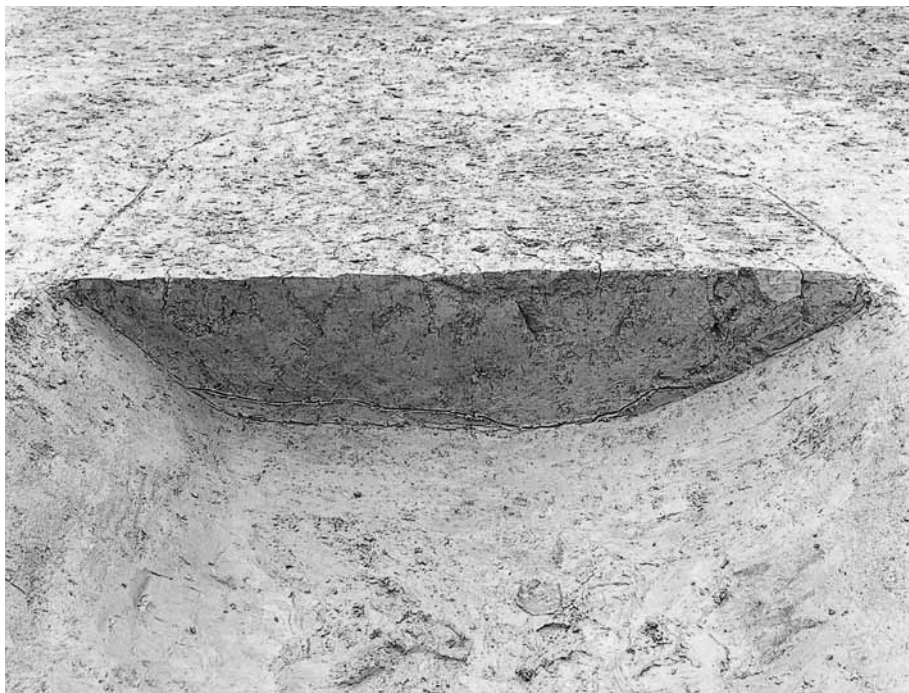
1. 1号溝状遺構（東から）



2. 1号溝状遺構（西から）



3. 2号溝状遺構（南から）



1. 2号溝状遺構（南から）



2. 西壁土層（東から）



3. 西壁土層（東から）



1. トレンチ（北東から）



2. トレンチ（南から）



3. 全景（南東から）



150图1



150图6



150图1



150图9



150图2



151图14



150图4



151图15



150图5



151图16

蒲船津水町遺跡

6. 蒲船津水町遺跡

蒲船津水町遺跡は、柳川市三橋町大字蒲船津534-1、534-2、534-11～14に所在し、柳川市街地の東部に位置し、西鉄柳川駅の北東約500mにあたる。付近は沖端川の左岸の沖積地であるが、標高3m程度の低湿地、いわゆる「クリーク地帯」であり、現在でも多くの水路が縦横にはしる。地形の起伏はほとんど見られない。

発掘調査は、平成18年3月22、23日と19年5月10、11日に行った試掘調査の結果に基づいて、約1,800㎡の範囲に調査区を設定して実施した。平成19年5月11日から重機による表土除去作業を開始し、5月28日からは作業員による人力での作業に移行して、8月10日に東亜航空技研(株)による空中写真撮影、8月21日には現地での調査をすべて終了した。その後、重機による埋め戻し作業を行った。

1. 遺構と遺物

調査地点周辺は、現在まで水田として利用されてきており、標高は極めて低い。周囲は現在ではコンクリート擁壁で囲まれてかつての姿は留めていないもののクリークが縦横に張り巡らされている。

調査の結果、遺構面は現在の地表面からわずかに10～20cm程度の深さで検出し、標高2.6～



第152図 蒲船津水町遺跡周辺地形図(1/2,000)

2.8mの範囲である。

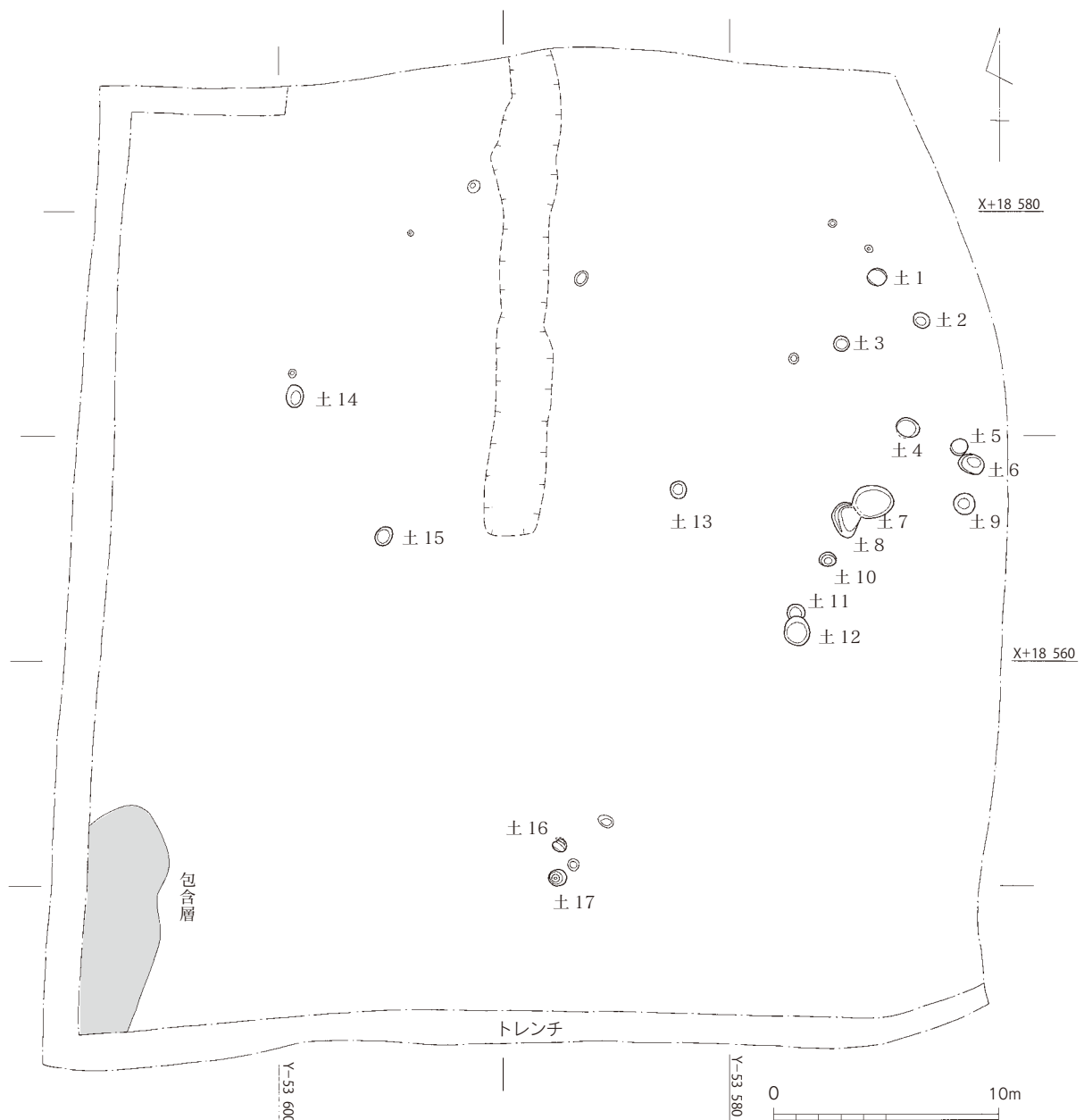
主な遺構は、井戸状の土坑17基と、調査区南西隅部で遺物包含層を検出した。

(1) 土坑

今回の調査では17基の土坑を検出した。ほとんどの土坑が平面円形または楕円形で、深いものが多いのが特徴で、一見素掘りの井戸のようである。しかしながら、土坑は地山の黄灰色粘土層と下層の灰色粘土層までを掘り込んでいるに過ぎず、湧水層には到達していないため、井戸とは考えにくい。

1号土坑（図版32、第154図）

調査区北東隅に位置する。平面形は上縁部径80cmの円形で、底面はレンズ状に中央部が深く



第153図 蒲船津水町遺跡遺構配置図(1/300)

て40cm程。埋土は3層に分かれて同様にレンズ状に堆積しており、上層は黒灰色粘土・灰色粘土のブロックを含んだ黒色粘質土、中層は灰色粘土と暗灰色粘土の混合土、下層は暗灰色粘土と黒色粘質土の混合土である。

出土遺物(第155図1)

土師器甕。口縁部内面は横方向のハケメ、胴部外面は縦方向のハケメ、内面はヘラケズリ調整。

2号土坑(図版32、第154図)

調査区の北東隅部に位置する。平面形は75×65cmの若干歪んだ楕円形で、深さ155cm。底面は45×40cmの同じく楕円形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物(図版40、第156図2～5)

5は須恵器皿で、約半分を欠失するが、復元径17.4cm、器高1.7cm。焼成は軟質である。底部外面中央部には墨書があり、「衆カ」。2～4は土師器甕。2は口縁部が強く外反する。胴部内面は横方向のヘラ削り調整。3・4は「く」字に近く外反して端部が薄く比較的シャープな口縁部を持つ。胴部外面は縦方向のハケメ、4は内面が横方向のハケメ調整。いずれも破片であるが、復元可能な4では口径26.0cm、胴部最大径23.1cm。

3号土坑(図版32、第154図)

調査区北東部に位置する。径65cmの平面円形で、深さ90cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物(図版40、第155図6～13)

6は須恵器皿で、器高1.9cm。7は須恵器甕で、復元口径18.2cm。内外面ヨコナデ調整であるが、頸部内面にはケズリの痕跡が残る。8～10は土師器杯。8は体部と底部の境に明瞭な稜を持ち、9はやや不明瞭、10は不明瞭で底部にヘラ切り痕が残る不安定である。9の復元口径は12.4cm、器高3.1cm。11・12は皿で、11は復元口径12.4cm、器高1.6cm、12は復元口径11.6cm、器高2.0cm。13は甕で、「く」字形に開く口縁部を持つ。

4号土坑(図版33、第154図)

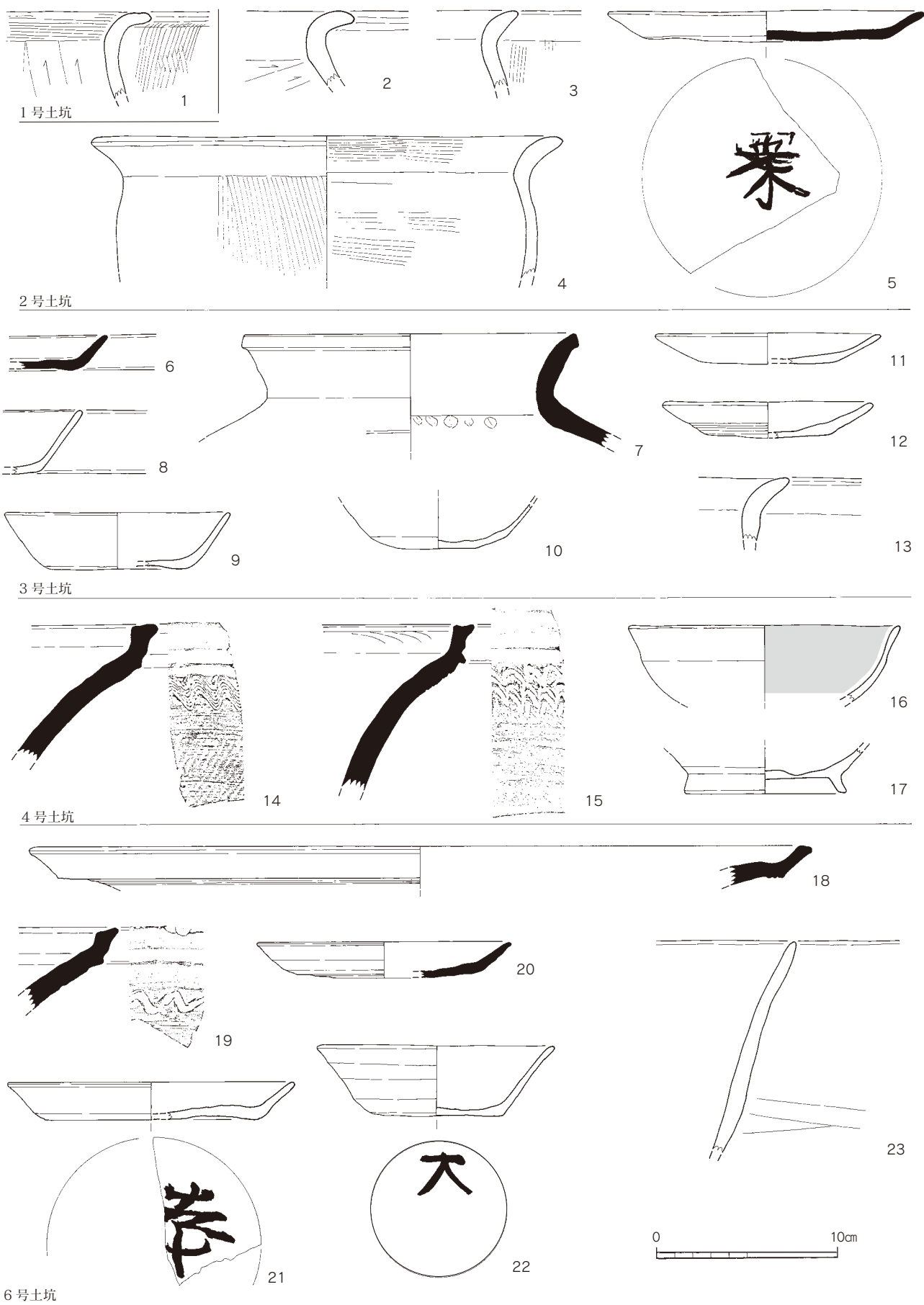
調査区東部に位置する。上縁部で95×80cm、底面では90×65cmの楕円形で、深さ185cm。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、底から75cm程の部分でわずかに段を持って細くなる。

出土遺物(図版40、第155図14～17)

14・15は須恵器甕で、ほぼ同形のもの。頸部は外反して開き、口縁部は屈曲して上方に立ち上がり上端部は平らになる。口縁部と頸部の境の屈曲部には三角突帯をつくり出し、その下には14は単位7条の、15は単位2条2段の波状文を施文する。16は黒色土器碗で、内面のみを燻している。体部は丸く、口縁部をわずかに外反させる。復元口径15.0cm。17は瓦器碗であろうが焼成が堅緻で須恵質である。高台は高く「ハ」字に開く。内外面ヨコナデ後に内底部はナデ調整を行うが粗い。

5号土坑(図版33、第154図)

調査区東部隅に位置する。70×65cmの平面楕円形で、深さは75cm。底はほぼ平らだが、中央部が若干深くなる。出土遺物はない。



第155図 1～4・6号土坑出土遺物実測図(1/3)

6号土坑（図版33・34、第154図）

調査区東部隅に位置し、5号土坑と近接する。平面形は105×80cmの楕円形で、深さ155cm。断面形はやや歪んだ袋状で、底も不整形である。埋土は上層から灰色粘質土、暗灰色粘土と黄灰色粘土ブロックの混合土、暗灰色粘土である。

出土遺物（図版40、第155図18～23）

18・19は須恵器甕。18は復元すると口径43.2cmの大形のもので、頸部が大きく広がり、鋭利な稜を作って口縁部が立ち上がる。外面はカキメ調整で口縁部はその後ヨコナデ調整。19は口縁部と頸部の境を三角突帯状につくり出して屈曲する。頸部外面には1条の波状文を施文する。20は皿で、底部にやや丸みを持つ。復元口径14.0cm、器高2.0cm。21は土師器皿で、復元口径15.9cm、器高2.0cm。底部外面には墨書があり、「幸」と読める。22は坏で、口径13.1cm、器高3.9cm。底部外面に墨書があり、「大」であろう。23は鉢と考えられ、外面下位は回転ヘラケズリ調整を行っている。

7号土坑（図版34、第156図）

調査区東部に位置し、8号土坑の一部を切る。平面形は長軸長180cm、短軸長140cmの楕円形で、深さ45cm。埋土は上層から黒色シルト質土、黒色土ブロックを含む黄灰色粘土、黒色土、黄灰色粘土ブロックを含む暗灰色粘土の順で堆積している。

出土遺物（図版40、第157図1～4）

1は土師器碗。体部は底部との境に丸みを持ち、高台は低く畳付部が細く三角形状になる。2は坏で、底部と体部の境が明瞭である。3・4は瓦器碗で、高台は三角形で外に開く。

8号土坑（図版35、第156図）

調査区東部に位置し、遺構の北東部を7号土坑によって切られる。平面形は現状で155×115cm程度の楕円形であるが、遺構の北西から西側の上面から約10cmの部分には崩落の痕跡があることから、本来の規模は145×85cm程度の楕円形で、深さは115cmが残存する。また、底面はほぼ水平で、壁面との境には明確な角を持っており、今回調査した他の土坑と比較して整然とした印象を受ける。

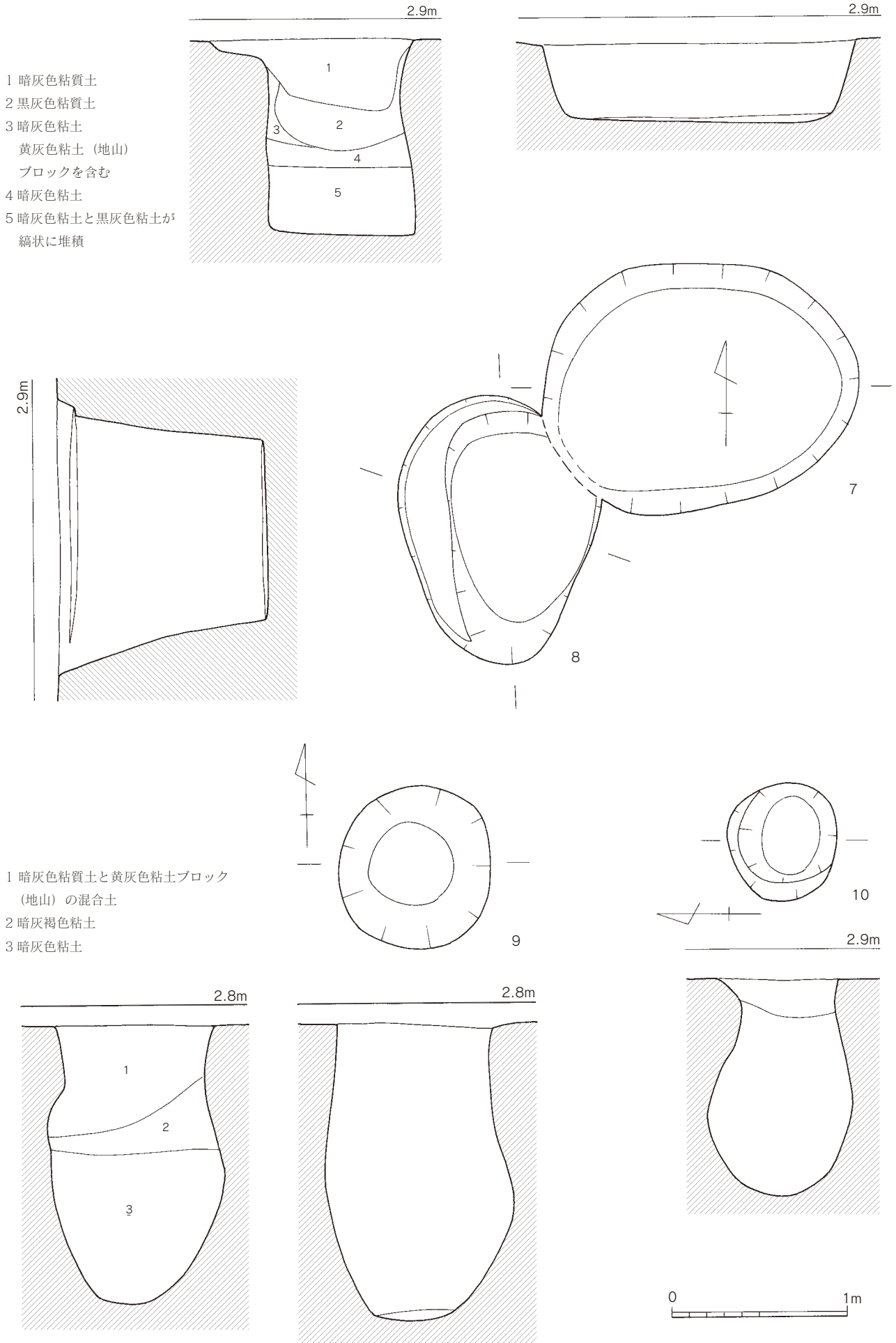
出土遺物（図版40、第157図5～12）

5は須恵器甕で、頸部は短く開き、口縁部の下が三角突帯状に張り出す。口径18.0cm。6は土師器碗で、体部は直線的に開くが下位で若干屈曲する。高台は端部が丸く外に開く。復元口径16.0cm、器高6.0cm。7～10は坏で口径12.0～13.7cm。体部が比較的直線的に開くもの（7・8・10）と、彎曲するもの（9）がある。7は口縁部が3箇所欠けているが完形に近い。8の底部外面には墨書があり、「春カ」。11は皿で、復元口径15.0cm。体部外面に不明瞭ながら暗文状の工具痕が観察できる。12は甕で、復元口径・胴部最大径ともに29.0cm。

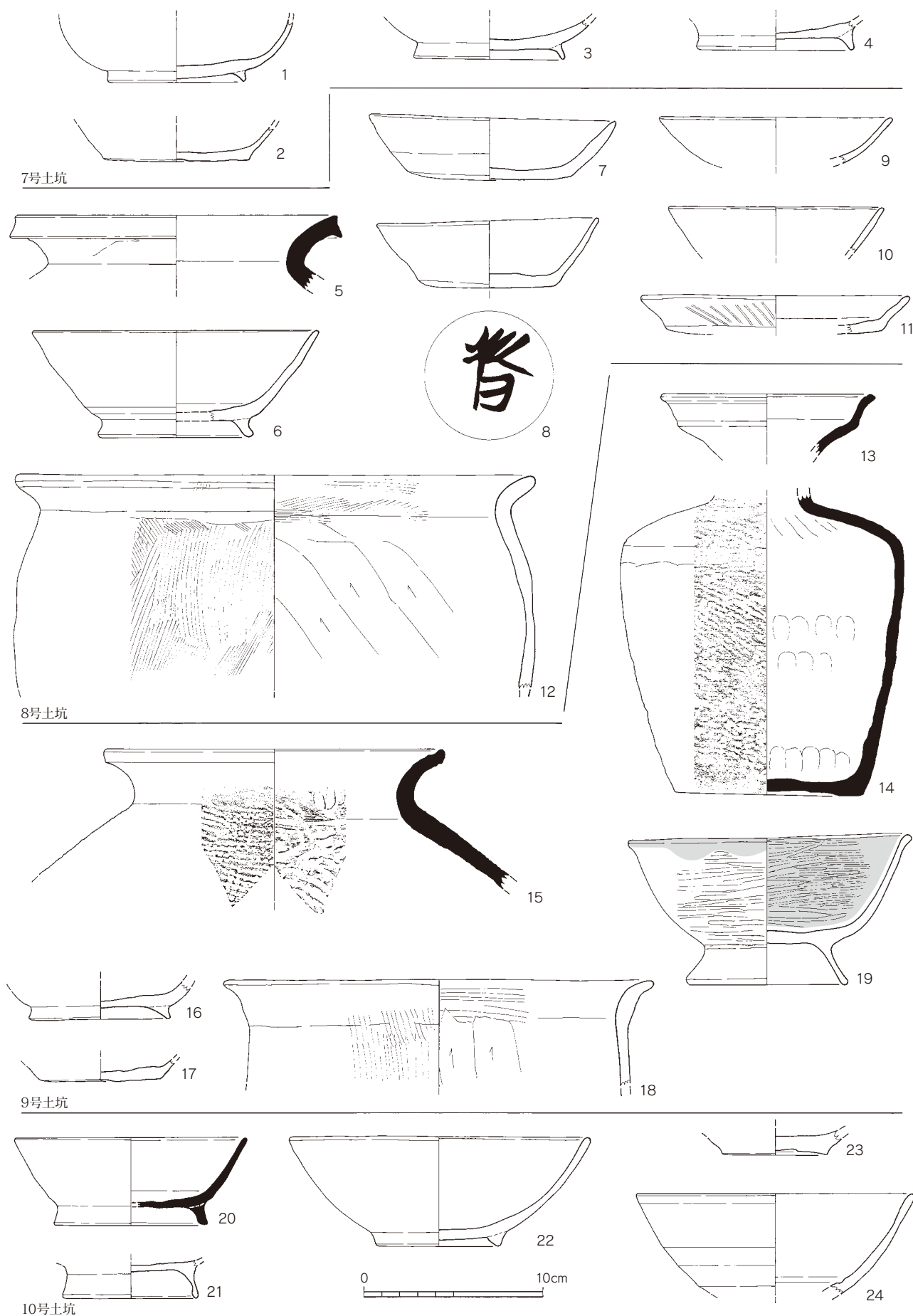
9号土坑（図版35・36、第156図）

調査区東隅部に位置する。平面形は95×85cm程のほぼ円形で、深さ165cm。断面形は中位で一旦105cm程度まで広がり、底ですぼまるが平坦面をもたない袋状を呈する。埋土は上層から暗灰色粘質土と黄灰色粘土ブロックの混合土、暗灰褐色粘土、暗灰色粘土の順で堆積していた。

出土遺物（図版40、第156図13～19）



第156図 7～10号土坑実測図(1/30)



13・14は須恵器壺で、同一個体の可能性が高い。口縁部は頸部との境で屈曲して外反する。体部は肩の強く張った器形で、外面にタタキ痕が残る。復元口径12.0cm、最大径15.8cm。15は甕で、口頸部は短く外反する。復元口径19.0cm。16は土師器碗で、暈付部が細くなる。17は坏か。わずかに残存している体部は薄い。18は甕で、口縁端部は細くシャープである。復元口径24.0cm。19は黒色土器碗で、口縁部の一部を欠くがほぼ完形。口縁部は短く外反し、高台は高く大きく開く。内面のみを燻し、ミガキも内面は丁寧であるが、外面は比較的粗く体部下位にはヘラケズリ痕が残る。口径15.8cm、高台径9.0cm、器高8.5cm。

10号土坑（図版36、第156図）

調査区東部の7・8号土坑と11・12号土坑の中間に位置する。上縁部での平面形は65×60cmの円形であるが、遺構の南から西にかけての部分に崩落の痕跡があるため、本来は径約55cm程度の円形であろう。深さ125cmで、断面形は9号土坑と同様に袋状で、中位で80cm程に広がり底に平坦面をもたない。

出土遺物（図版40・41、第157図20～24）

20は須恵器碗。体部は直線的に広がり、高台は「ハ」字に広がる。復元口径13.0cm、器高4.9cm。21は黒色土器碗の底部と考えられ、胎土は精良である。高台は薄く高い。内面は磨滅しているが燻した痕跡が残る。22は瓦器碗で、体部は丸みを持ち、高台は断面三角形。復元口径16.8cm、器高6.1cm。23は越州窯系青磁碗の底部で、蛇ノ目高台である。復元底径5.9cm。24は白磁碗で、体部下位に丸みを持ち上位は直線的に開き、また見込みに沈線をもつ。復元口径15.6cm。

11号土坑（図版36、第158図）

調査区東部に位置し、遺構の南側1/3程を12号土坑によって切られる。上縁部で径80cm程度の円形で、深さ140cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、上面から20cm程の部分で段をもって下位が狭くなっているのは上部の崩れによるものか。

出土遺物（図版41、第159図1・2）

1は須恵器鉄鉢形土器。口縁端部は上方に摘み上げ、最大径は口縁部直下にある。復元口径16.6cm、体部最大径18.8cm。2は黒色土器皿であろうか。完形で、体部は丸みをもって広がる。口径16.1cm、器高3.0cm。内外全面黒色を呈し、底部外面はヘラケズリ調整、それ以外の内外面は丁寧なヘラミガキ調整である。ヘラミガキ部分には通有の黒色土器には見られない光沢があり、漆等を塗布したものと考えられる。

12号土坑（図版37、第158図）

調査区東部に位置し、11号土坑を切る。平面形は130×110cm程度の楕円形で、深さ185cm。壁面は底からほぼ垂直に立ち上がり、中位で段をもって上方が若干広がる。崩落によるものか。埋土は上層から暗灰褐色粘質土、暗灰色粘土と黒色粘土の混合土、暗灰色粘土の順で堆積している。

出土遺物（図版41、第159図3～11）

3は須恵器坏か。体部は直線的に広がり、焼成はやや軟質。復元口径13.0cm。4・5は土師器坏で、4は体部に丸みがあり、5は直線的である。6・7は皿で、体部はほぼ直線的に広がる。6は底部外面に板状圧痕残り、復元口径15.6cm、器高2.4cm。8・9は黒色土器碗で、2点とも

内面のみを燻す。8は比較的小形品で、体部下位で内彎して立ち上がり、9は高台が「ハ」字に開く。10・11は甕の口縁部破片で、内面は口縁部にまで横方向のハケ目調整を行う。

13号土坑（図版37、第158図）

調査区中央東寄りに位置する。75×65cmの円形に近い楕円形で、深さ55cm。埋土は2層に分かれ、上層から黒色粘質土、黒灰色粘質土と黄灰色粘土の混合土の順になっている。

出土遺物（図版41、第159図12・13）

12は瓦器碗で、高台は逆台形状を呈する。13は白磁碗で、器壁は薄く、口縁部がわずかに屈曲して開く。復元口径15.4cm。

14号土坑（図版38、第158図）

調査区北西に位置する。平面形は90×75cm程度の楕円形で、底では60×35cm程に狭くなり、深さは165cm。埋土は上部の一部が黒色粘質土と黒灰色粘質土の混合土である以外は、灰色粘土ブロックを若干含む黒灰色粘土である。

出土遺物（図版41、第159図14・15）

14は滑石製石鍋。口縁部は内傾し、横長の方形把手をもつ。内面には楔形に工具痕が多く残る。外面には煤が付着しており、使用の痕跡が認められる。15は土錘で、上下端部の1/5程を欠く。長さ4.6cm、最大径2.3cm、重さは現状で18g。

15号土坑（図版38、第158図）

調査区中央西寄りに位置する。平面形は85×70cm程度のやや歪んだ楕円形であるが、断面形は深さ105cmで、底が水平で壁が垂直な整然とした形態をしている。埋土は4層に分かれてレンズ状に堆積しており、上層から黒灰色粘質土、黒色粘質土ブロックと灰色粘質土ブロックを含む暗灰色粘質土、黒色粘質土、灰色粘土と黒色粘質土の混合土の順になっている。

出土遺物（図版41、第159図16・17）

16は土師器碗で、体部から口縁部の半分程を欠失する。胎土は精良で、体部は下位で内彎し、口縁部は外反する。復元口径12.2cm、器高4.7cm。また、体部中央には縦2.0cm程度、横2.5cmの穿孔が認められる（図版41-17）。周囲の摩耗の状況から古く開いたものと考えられるが、意図的なものか不明なため図示はしていない。17は完形の土錘で、長さ3.6cm、最大径1.5cm、重さ6g。

16号土坑（図版39、第158図）

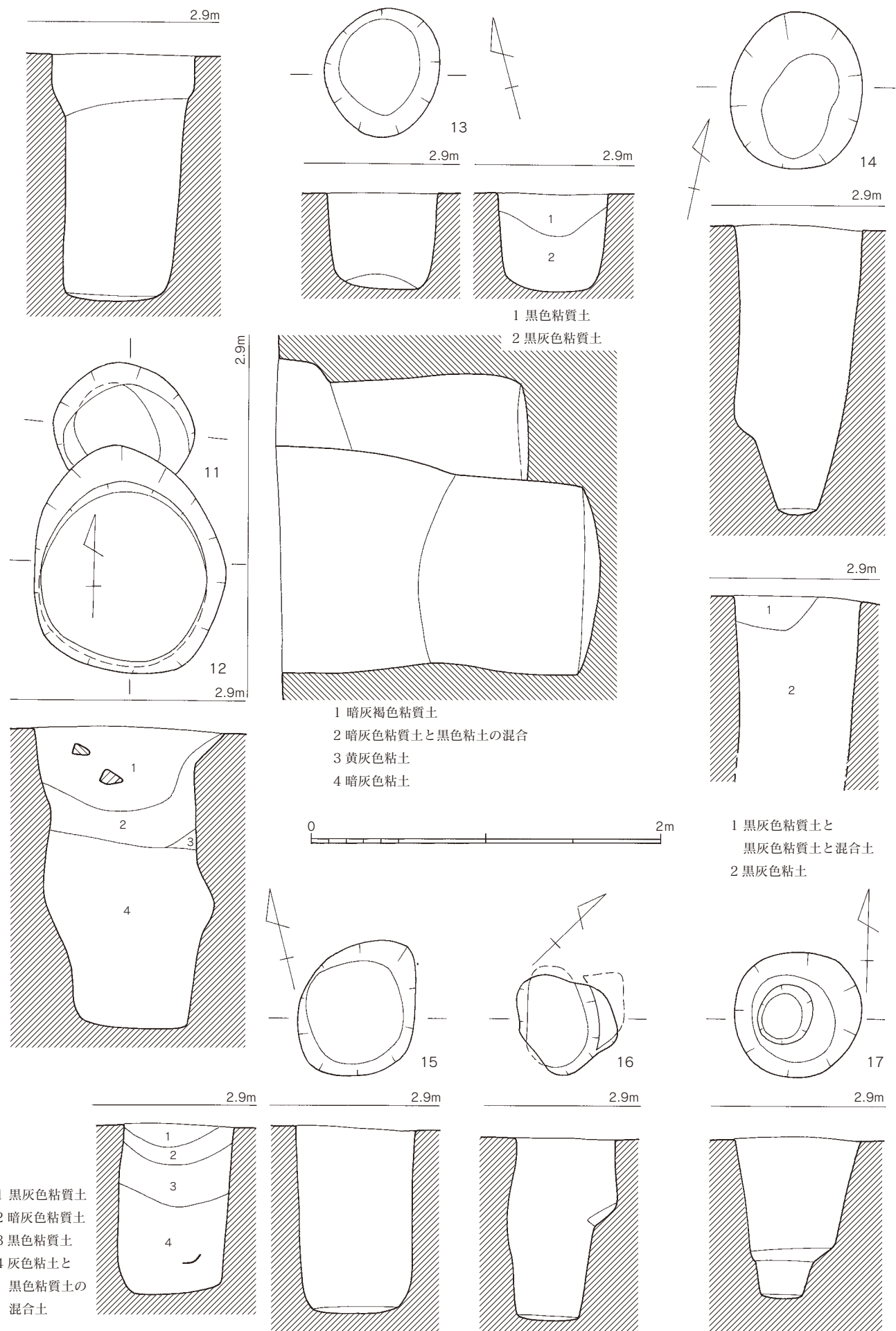
調査区南部に位置する。平面形は現状では60×55cmの不正形であるが、土坑の北東側の上半部には崩れた痕跡があるため、本来は60×45cm程度の楕円形であると考えられる。底は平坦で60×35cmの同じく楕円形で壁は垂直に近く立ち上がる。

17号土坑（図版39、第158図）

調査区南部に位置し、16号土坑とは近接する。平面形は径70～75cmの円形で、底をさらに35×30cmの楕円形に掘り込む二段掘り状の形状を呈する。深さ90cmで壁は斜めに立ち上がる。

出土遺物（図版41、第159図18）

土師器碗で、体部は丸みもち、高台は高い。器面は風化しているが、内面にはヘラミガキの



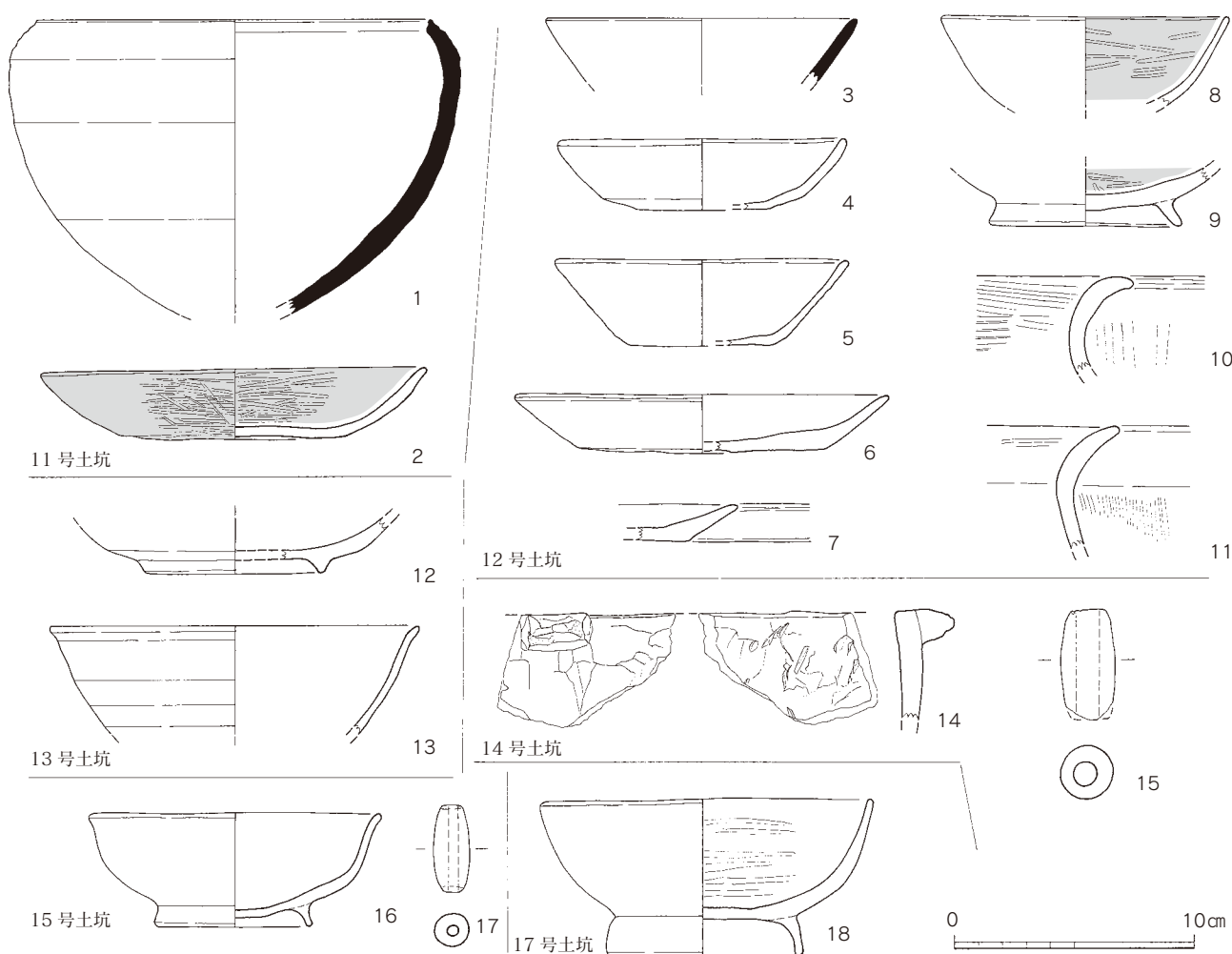
第158図 11～17号土坑実測図(1/30)

痕跡がわずかに残る。口径13.9cm、器高6.5cm。

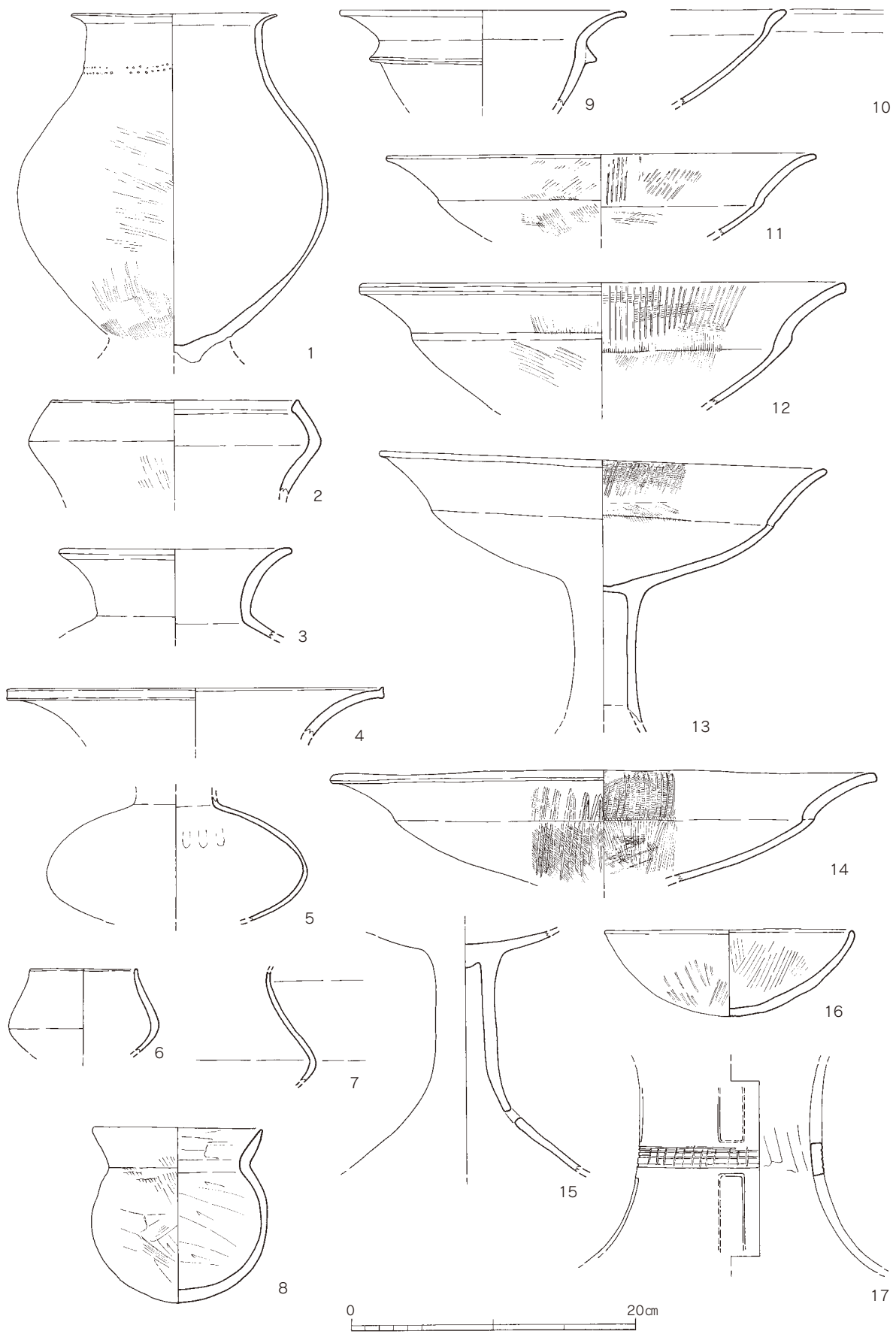
(2) 遺物包含層

本遺跡は遺構面がきわめて低く、西側に近接するクリークの水位とほとんど差がないことから、雨季とも重なり調査期間中水には終始悩まされた。このため調査区の南側から西側の外周に沿って幅1.5m程の排水溝を手作業で掘削した。作業の途中、調査区の南西隅部から弥生時代後期の土器がまとまって出土したため、この周囲を精査したところ、10×3.5mの範囲で不正形の浅い落ち状の部分を検出し、弥生土器・土師器が出土した。この部分はさらに南西側の調査区外に延びるものと考えられるが、深さは10～15cm程度とごく浅く、またその埋土は周囲の遺構面の地山である灰色粘土に対して区別の付きにくい黄灰色粘土で判然としない部分もあった。遺構とするのはもちろん、地形の落ちとするのも躊躇されるため、ここでは遺物包含層として報告する。出土遺物(図版41、第160図)

1～7は弥生土器壺。1は中位に最大径がある球形の体部をもち、また体部と頸部の境は不明瞭でなだらかにすばまるが、この位置に上下二段の列点文を施文する。口縁部は器壁がごく薄く、屈曲して短く開く。底部には剥離の痕跡が残り、この部分に裾広がりの脚部が付くものと考えられる。口径14.4cm、体部最大径21.6cm。2は外面に稜をもつ袋状口縁部分。3は口頸部が外反



第159図 11～15・17号土坑出土遺物実測図(1/3)



第160図 包含層出土土器実測図(1/4)

して開く広口壺で、口径16.4cm。4は口頸部が大きく開き、口縁端部を上方に摘み上げる。復元口径26.3cm。5は長頸壺の体部で扁球形である。器壁は薄く胎土は精良。復元最大径18.2cm。6・7は小型の短頸壺で、体部最大径が下位にあり、この部分で屈曲して直線的にすぼまる。口縁部は6はわずかに上方に伸び上がり、7は短く外反する。ともに胎土は精良。8は土師器の小型丸底壺で、口縁部の一部を欠く以外はほぼ完形。球形の体部に直線的に広がる口縁部が付く。器面は全体的に風化による剥落が多いが、体部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ調整。口径11.8cm、体部最大径12.3cm、器高12.3cm。9～15は弥生土器高坏。9は外反する口縁部に半球形の坏部をもち、外面に1条の三角突帯が付く。復元口径20.0cm。10は口縁部内面を肥厚させる。11～14は坏部中位で屈曲して、口縁部は外反して開く。全体的に器面は風化しているが、ハケメ調整の後放射状に暗文様のミガキ調整を行う。復元口径30.0～38.2cm。15は脚部で、1箇所穿孔が認められる。16は鉢で、素口縁の半球形を呈する。器面は不明瞭ながら、内外面ともハケメ調整と考えられるが、外面は砂粒が動くほど強く工具を当てている。口径17.3cm、器高6.0cm。17は器台で、上下2段の方形透かし孔が確認でき、その間には3～4条の沈線を廻らせ縦位のキザミを入れることによって格子目文をつくりだす。

小結

今回の調査で検出した主な遺構は、土坑17基である。出土した遺物は9世紀から12世紀頃のもので、ほぼ平安時代を通して掘削されたことを示している。土坑の平面形は円形あるいは楕円形で、深いものが多く、一見すると素掘りの井戸のようでもある。しかしながら、いずれの土坑も粘土層を掘り込んでいるに過ぎず、湧水層にまでは到達していない。したがって井戸とするのは困難と考えるが、土坑の周囲にはこれと関連する遺構も認められず、用途等は不明と言わざるを得ない。

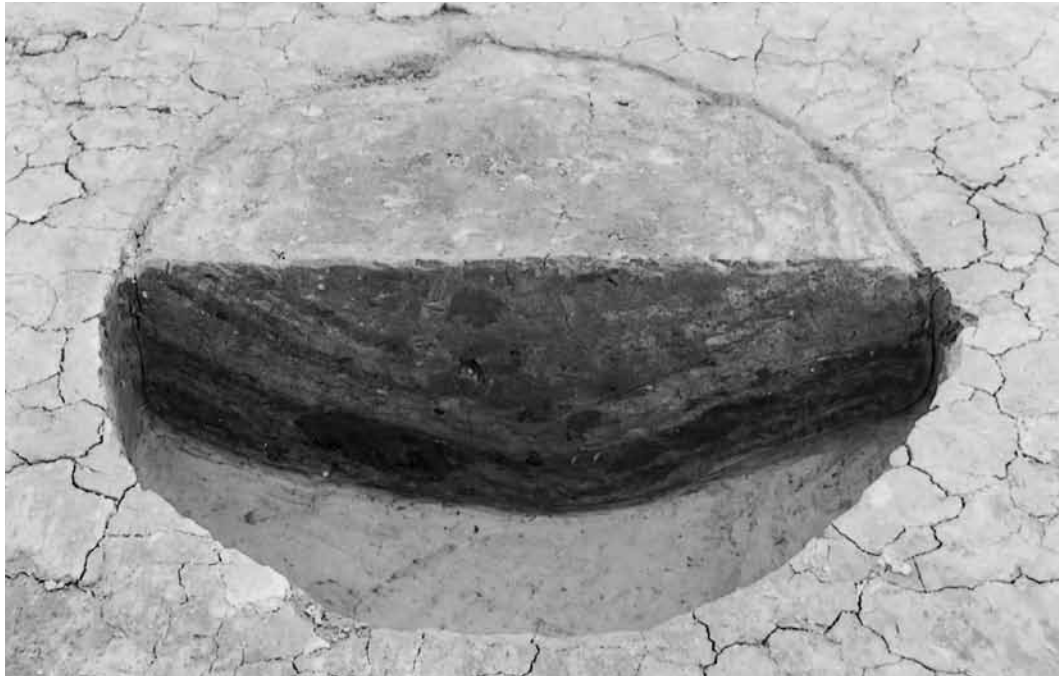
出土遺物の中には墨書土器や、漆を塗布したと考えられる土器、輸入陶磁器などが含まれており、ここが重要な地点であることは間違いないものと考えられる。とはいえ、遺構の性格が不明である以上、今回の調査区だけで遺跡の性格を判断することは困難であろう。



1. 蒲船津水町遺跡全景
(北上空から)



2. 同上全景(上空から)



1. 1号土坑（南から）



2. 2号土坑（南から）



3. 3号土坑（南から）

1. 4号土坑（北から）



2. 5号土坑（西から）



3. 6号土坑土層
（北西から）

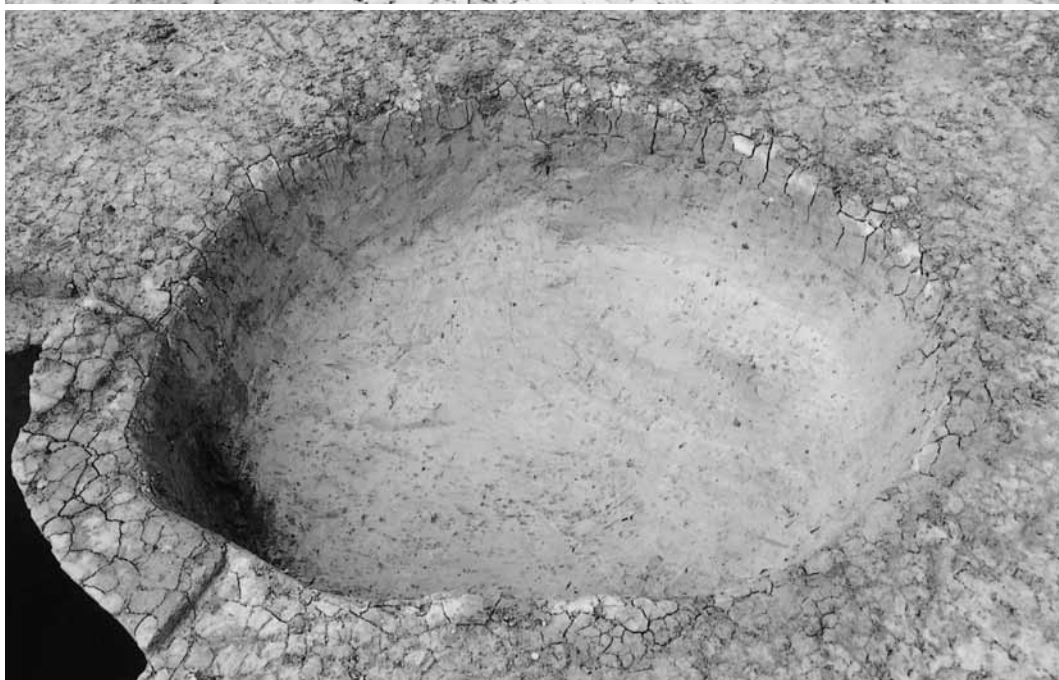




1. 6号土坑（西から）



2. 7号土坑土層
（東から）



3. 7号土坑（南から）

1. 8号土坑土層
(南から)



2. 8号土坑 (東から)



3. 9号土坑土層
(南から)





1. 9号土坑（東から）



2. 10号土坑（東から）



3. 11号土坑（南から）

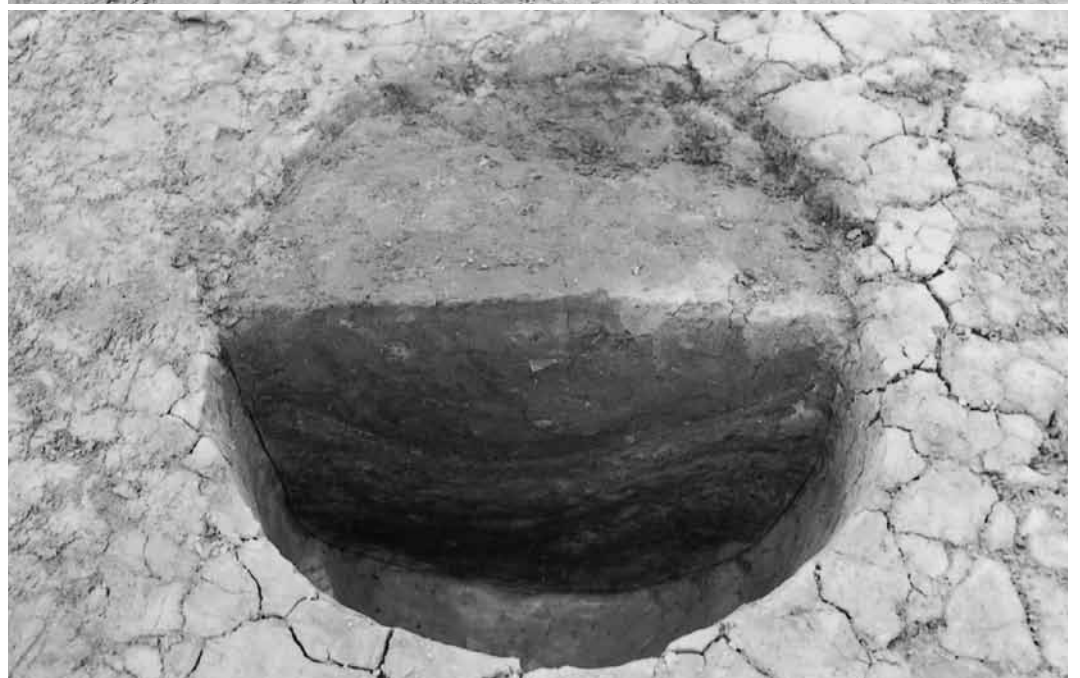
1. 12号土坑土層
(南から)

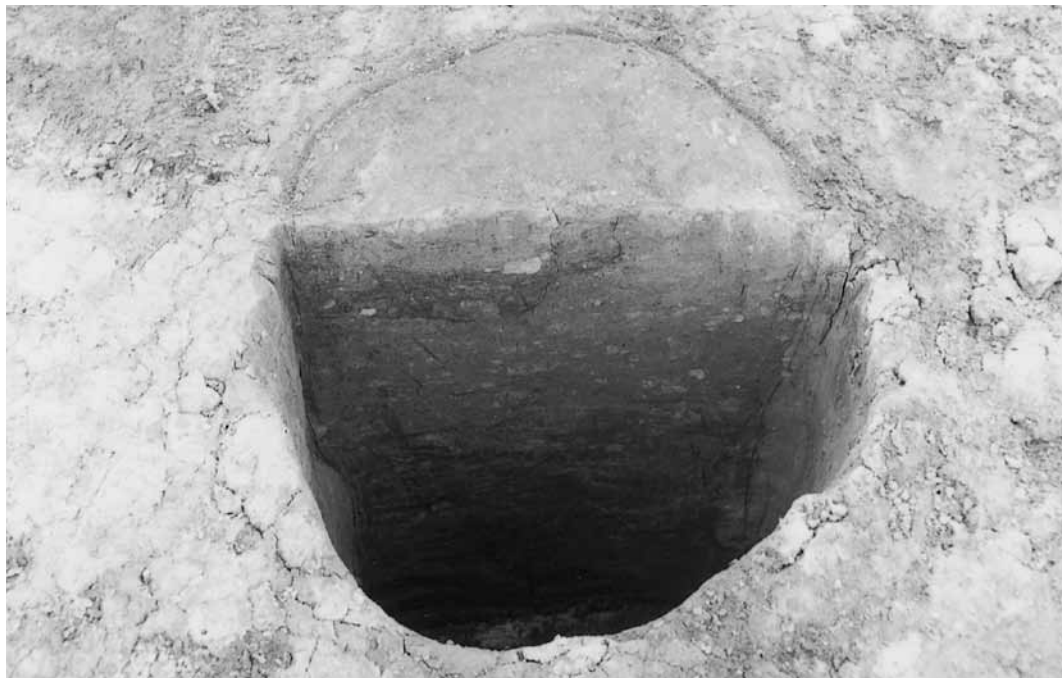


2. 12号土坑(東から)



3. 13号土坑土層
(南西から)





1. 14号土坑土層
(南から)



2. 14号土坑 (南から)



3. 15号土坑土層
(南から)

1. 16号土坑（西から）

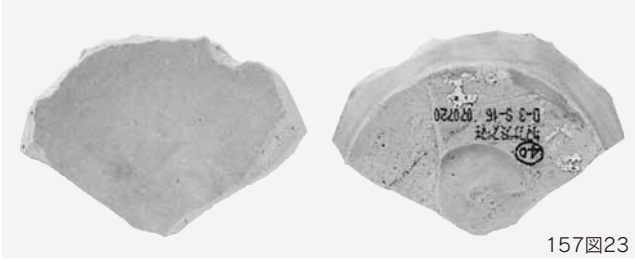


2. 17号土坑（南から）

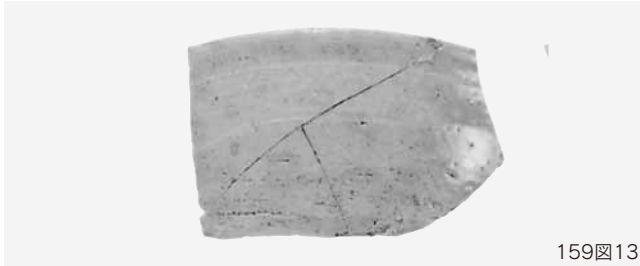
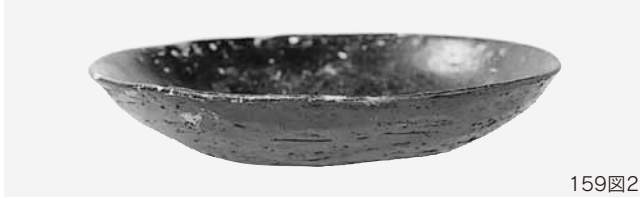
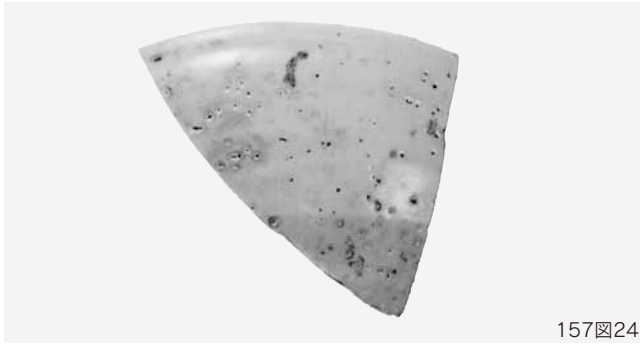


3. 遺物包含層掘削状況
（北から）





出土遺物 1



報告書抄録

ふりがな	やかべまちやしきいせきよん・かまふなつにしのうちいせき・かまふなつみずまちいせき							
書名	矢加部町屋敷遺跡Ⅳ・蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡							
副書名								
シリーズ名	有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第12集							
編著者名	秦 憲二・進村真之・小川泰樹							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 小郡市三沢5208-3							
発行年月日	西暦2012年3月31日							

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
			市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
やかべまちやしき 矢加部町屋敷 5・1次調査	ふくおかけんやながわし 福岡県柳川市 おおあぎやかべあぎまちやしき 大字矢加部字町屋敷		402079	140392	33° 10′ 46″	130° 24′ 47″	2004.6.15 ～ 2004.10.4	1,730㎡	国道バイパス
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
矢加部町屋敷 5・1次調査	集落	江戸 明治 大正 昭和	土坑・廃棄土坑	39	土師器	ガラス製品	キセル	木簡 近世・近代の鋳造関係 遺物・鋳型	
			大土坑	3	瓦質土器	銅銭	るつぼ		
			溝状遺構・大溝	10	陶磁器	木製品	土人形		
			埋甕	8	瓦	下駄	鋳型		
			井戸	1	窯道具	建築材	砥石		

遺跡の概要

本遺跡は江戸時代の町屋跡の端部にあたり、17世紀中葉から現代にいたる遺構・遺物が見られ、連綿と集落が営まれていたことが分かった。町屋の中心部分は今次調査区の東側の久留米柳川街道沿いであり、その通りに面して並ぶ建物群の裏手にあたる。

18世紀中葉から飛躍的に遺物が増加し、多くの土器・陶磁器類が出土したが、なかでも鋳造関係の遺物が注目される。また、近世の筑後地方に見られる土師質の瓦や窯道具も多量に出土している。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
			市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
かまふなつにしの 蒲船津西ノ内 遺跡	ふくおかけんやながわし みつはしまち 福岡県柳川市三橋町 かまふなつ 蒲船津314-1～4・ 5A番地		402079	780048	33° 9′ 52″	130° 25′ 22″	2006.12.4 ～ 2007.1.31	800㎡	国道バイパス
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
蒲船津西ノ内 遺跡	集落	中世	土坑	2	土師器	瓦質土器	土鈴		
			灰だまり状遺構	1	磁器	銅銭			

遺跡の概要

本遺跡は戦国時代の集落で、建物跡は発見されていないが井戸らしい土坑が検出された。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
			市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
かまふなつみずまち 蒲船津水町遺跡	ふくおかけんやながわし みつはしまち 福岡県柳川市三橋町 かまふなつ 蒲船津534-2番地		402079		33° 10′ 2″	130° 25′ 24″	2007.5.10 ～ 2007.8.29	1,800㎡	国道バイパス
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
蒲船津水町遺跡	集落	古墳 平安	不整形落ち込み	1	土師器	須恵器	滑石製石鍋	墨書土器	
			井戸状遺構	20	砥石	土錘			

遺跡の概要

本遺跡では、古墳時代初頭の不整形な落ち込みと、平安時代の井戸状遺構が約20基あり、その埋土からは墨書土器が出土している。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 217104
登録年度 23	登録番号 0013

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第12集

矢加部町屋敷遺跡Ⅳ・蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡

平成24年(2012年) 3 月31日

発 行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号
印 刷 株式会社 三光
福岡市博多区山王1丁目14-4